

第3章

ヒンドゥー教寺院の非対称伽藍に

投影された神観念

はじめに

第1章で見てきたように、非対称の伽藍構成を有するチャンディにおいては、敷地中心点を避けて祠堂群がずらされていると判断することは可能である。しかし、なぜこのようなことが行われるのかという問題についての検討は、充分に行われてきたとは言い難い。そしてこの問題に対して一つの解釈を与え得る資料が、インドに数多く残された「シルパ・シャーストラ (Silpaśāstra)」,あるいは「ヴァーストゥ・シャーストラ (Vāstuśāstra)」と呼ばれる建築の理論を内容とする文献群である。その殆どの文献には、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを用いて行う地鎮祭儀礼についての記述が認められる⁽¹⁾。インドの建築造営に際して同儀礼が極めて重要な位置を占めていたことは想像に難くない。宗教建築、世俗の建築を問わず、先ず建築を始めるにあたって、その建設用地の上に、ヴァーストゥ・プルシャ (vāstupuruṣa) と呼ばれる土地の精霊を象徴した人体と、内部を格子状に分割した正方形のグリッドとが重ねて描かれ、そのマンダラの上で地鎮祭を行うことを一連の文献群は詳細に述べている⁽²⁾。

そしてマンダラの特定の部分は、土地の精霊であるヴァーストゥ・プルシャの身体の脆弱な部分に対応して土地の急所と見なされ、その部分上に柱や建物の一部等を配置することが禁止される場合がある。バーネット＝ケンペルス及びスクモノは、こうしたヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの観念における配置設計上の禁忌に基づき、寺院の敷地中心点が避けられ、また祠堂群がずらされていると推測している⁽³⁾。しかしながらこの解釈は、インドの文献に直接あたって導き出されたものではないという点に先ず問題があり、また、敷地中心点が避けられるという点のみを根拠として、ヴァーストゥプルシャマンダラとの関連を論じて良いものかどうかは、改めて検討の余地が残されているといえるであろう。

本章では、インドの代表的な建築書ないし関連文献の読解を通じて、考察の対象とする寺院の非対称の伽藍構成に、先のヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの観念の影響を認め得るのかどうかという問題の検討を改めて行うことにする。また、考察の対象とする寺院の伽藍に祀られた諸神の配置と、マンダラに勧請された諸神の配置との関連についても、若干の検証を行うことにしたい。さらにそれらのチャンディの神格配置に認められる原則が、ヒンドゥー文化が今日まで残るバリに至るまでに、いかなる継承・変化を見せているのかを併せて明らかにしたい。

第1節 ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラにおける「マルマ（急所）」

ヴァーストゥ・シャーストラないしシルパ・シャーストラと称される文献において、地鎮祭儀礼は重要な儀礼の一つと見なされており、その儀礼が執り行われる際には、人体を模したヴァーストゥプルシャと呼ばれる土地に宿る精霊の上に、象徴的意味を持つグリッドが重ね合わせたヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと呼ばれる図形が描かれる。このマンダラは、64区画(8×8)あるいは81区画(9×9)に区切られるグリッドが基本型となり、特に寺院建築に相応しいマンダラはこのタイプとされる⁽⁴⁾。

マンダラのそれぞれの区画には特定の神格が勧請されるが、原則として中央の区画はブラフマスターナ (Brahmasthāna ブラフマーの場所) と呼ばれ、そこはブラフマー神の座所とされる(図23)。一方、上述のようにヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ上の特定の部分は、ヴァーストゥ・プルシャの中枢器官が存在する最も脆弱な「マルマ marma (急所)」であるとして、柱、扉、壁等をその部分上に設置してはならないと規定される場合がある⁽⁵⁾。ヴァーストゥ・シャーストラに関する文献的研究を行ったクラムリッシュは、「マルマ(急所)」について記された諸文献を検討した上で、「最も脆弱で、そして十分な注意をもって避けられるべき場所は、図形の中央の区画であるブラフマスターナの内外の地点である」と指摘している⁽⁶⁾。[図23],[図24]を

シキン	バルジ ヤニヤ	ジャヤンタ	インドラ	スールヤ	サティヤ	ブリシャ	アンタ リクシャ	アニラ
ディティ	アーバス						サーヴィ トラ	ブーシャン
アディティ		アーバ ヴァトサ	アルヤマン			サヴィトリ		ヴィクタ
ブジャガ		プリ ティ ヴィ ー ダ ラ	ブラフマー			ヴィ ヴァ ス ヴァ ン ト		プリハット クシャタ
ソーマ								ヤマ
パッラータ								ガンダ ルヴァ
ムキヤ		ラージュヤ クシュマン	ミトラ			インドラ		プリンガ ラージャ
アヒ	ルドラ						ジャヤ	ムリガ
ローガ	バーバヤク シュマン	ショーシャ	アスラ	ヴァルナ	クスマ ダント	スグリ ヴァ	ダウヴァー リカ	ヒトリ

≡ 図 23
インドでは東を上にして作図する伝統があり、ここではそれに従った

図 23

81 区画のグリッド 『プリハットサンヒター』(52.42-50)

頭	目	耳	首	肩	腕	腕	腕	腕
目	口						手	腕
耳		首		乳部		手		腋
首								腋
肩		乳部		心臓		腹		太腿
腕								膝
腕		手		腹		男根		下肢
腕	手						男根	上臀部
腕	腕	腋	腋	太腿	膝	下肢	上臀部	足

図 24

81 区画のグリッドに観念されるヴァーストゥプルシャ 『プリハットサンヒター』(52.51-54)。それぞれの区画が人体の部位に比せられ、全体として一個の人体を成す。ヴァーストゥプルシャは、グリッドの北東へ頭を向け、うつ伏せに横たわっている。対角線の交点はアティマルマ（大急所）。

例にとれば、ブラフマーの座す中央の区画は、土地の精霊であるヴァーストゥプルシャにとって、まさに急所と呼ぶに相応しい身体の中枢部である「心臓」に符合している。

ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラにおける「マルマ（急所）」についての記述を含んだ北インドの文献として、6 世紀前半に成立したとされる『プリハットサンヒター』⁽⁷⁾ (*Bṛhat Saṃhitā*) を挙げることができる。この文献によると、64 区画ないし 81 区画のグリッドで表されたマンダラにおける「マルマ（急所）」の位置は、ヴァンシャ (*vaśśa*) 線（マンダラに引かれた複数の対角線）の交点及びグリッドの各区画の中心点のことだとされる (52.57)。さらに、81 区画のグリッドの場合、ブラフマーが座す中央の区画の中心点とその内外の八地点は、特にアティマルマ (*atimarma* 大急所) と称され、最も脆弱な急所とされる⁽⁸⁾ (52.61-62) (図 24)。すなわち『プリハットサンヒター』では、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラのちょうど中心点に当たる個所が、避けるべき最も脆弱な急所の一つと見なされ、その地点上に建築部材等を設置することが禁じられているのである。

またこのことに関連して興味深いのは、南インドの代表的な文献の一つである『マヤマタ』⁽⁹⁾ (*Mayamata*) において、ガルバグリハ (*garbhagrha* 主神の像を中心に納める部屋、内陣) におけるリンガ (ないし神像) の「ずらし」に関する規定が認められることである。『マヤマタ』の第 33 章には、次のように記されている。

賢者は、リンガあるいは神像をガルバグリハの中央におくべし。しかし、(ガルバグリハのちょうど中心を通る) 線より、幾分北東にずらすべし。(そのために)、入口の幅は 21 の部分に分割され、そして中央の部分は、ブラフマーの区画 (の中央) に対応する。(その中央の部分は) 次に六つの部分に分割され、その六つの内の二つの部分が、(神に対して) 左側の境界線から始めて、(基準) 点を決定する。そこから北 (へずれて) 東へ向かう線が引かれる (?)。(ちょうど中心を通る) 線はブラフマーの線であり、(左側の) 線はシヴァ (の顕現 リンガ) の中心を通る。(33.37b-40a)

解釈の若干困難な箇所が認められるものの、この文言から、祠堂のガルバグリハにリングを安置するときには、そのちょうど中心に置かずに幾分北東へずれて配置されることが窺われる。また、ガルバグリハの中心線はブラフマーの線と呼ばれ、それを避けてリングが置かれている点が注目される。

次に、同じく南インドの文献である『マーナサーラ』⁽¹⁰⁾ (*Mānasāra*) の第 52 章には、以下の規定がある。

ガルバグリハの内部は七つの区画に分割すべし。ブラフマーの区画は中央に、そしてそのまわりには八神を配すべし。そのまわりのマヌシャの区画は 16 の区画にすべし。そのまわりのパイシャーチャの区画は 24 区画にすべし。中央のブラフマーの区画は 49 区画に分割すべし。ブラフマーの区画の中央にはブラフマーの線を印すべし。ヴィシュヌの線はその左側に印すべし。シヴァの線をそれら二つ（の線）の間に印すべし。ブラフマーとヴィシュヌの線はかくあるべし。そしてその間にはシヴァの線を印すべし。至高の建築家により安置されるべき単一のリングは、かくあるべし。複数のリングが安置される場合は、単一のリングと同様に作られるべし。単一のリングないし複数のリングは、ヴィシュヌの区画（？）の中でもよい（52.161-172）。

リングをどの線上に配置するかについての明確な記述はないが、既述の『マヤマタ』の規定から類推すれば、ガルバグリハの中心線であるブラフマーの線上を避けて配置されるものと考えられる。

以上のように、『マヤマタ』と『マーナサーラ』では、ブラフマーの線と称されるガルバグリハの中心線は避けられているものと考えられるが、このことは、マンダラの中央の区画がブラフマスターナ（ブラフマーの場所）と呼ばれ、その区画の内外の各点が避けられるべき脆弱な「マルマ（急所）」とされることに対応していると考えられる。

この対応関係は、人体～建築～居住空間～大宇宙という円心的・包括的な入れ子構造を基軸とする、インドのヒンドゥー教世界の空間構成の原理によって理解することが出来る。小倉氏は、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラが、一般の住居に始まり、寺院、宮殿、ひいては村落や都市の設計に至るまで、理念上、インドのあらゆるヒンドゥー教建築の基本的な設計規範になることを指摘している⁽¹¹⁾。すなわち、ガルバグリハの中心線（ブラフマーの線）を避ける発想と、マンダラの中央の区画（ブラフマーの場所）の内外に設けられたを急所として避ける発想とは、観念の上で入れ子状の関係にあるものと推測される。またこのように考えれば、ガルバグリハの中心線であるブラフマーの線は、単に現実的な設計の上で必要とされる線というだけではなく、ブラフマスターナがブラフマーの座す場所とされるように、ブラフマーと密接な係りのある線と考えることが可能である。

『マーナサーラ』には、ガルバグリハの中心を通るブラフマーの線の左側に引かれたヴィシュヌの線の間に、シヴァの線を印すことが述べられている。つまり、「線」という極めて特殊な形ではあるにせよ、ガルバグリハにヒンドゥー教の三大神であるシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーが観念されている。しかしガルバグリハ内で可視の存在として顕現する神は、リングとして形象を与えられたシヴァのみである。

また一方で、彫刻の造像に関する文献である『ヴァーストゥースートラ・ウパニシャッド』 (*Vāstusūtra Upaniṣad*) においては、壁面に浮彫りを施す際に、全体のプロポーションを定める 4 × 4 のグリッドを描くことがまず説かれ、さらにその中央の四区画がブラフマン（Brahman 梵）の場所であると同時に、グリッドの中心点である「マルマ（急所）」もブラフマン（梵）と見なされるべきと記されている⁽¹²⁾。ここにも「中心」を急所と見なす観念が看取される。また、『ヴァー

ストゥーストラ・ウパニシャッド』が彫刻に関する書であるにも係わらず、「ヴァーストゥ（建築の）」という語を冠していることについては、その記述内容の力点が、具体的な塑像術の技法というよりも、彫刻全体のプロポーシオンや構成に置かれているからであると考えられている⁽¹³⁾。

以上のように、急所、あるいは避けられるべき箇所と関連付けられる空間上の「中心」は、「中心の区画」、「中心線」、さらには「中心点」といったヴァリエーションを持っている。それらがどのように使い分けられているのかという問題には立ち入らないが、いずれにしてもそれらの「中心」は、ブラフマーないしブラフマン（梵）と密接な係わりを有するという点で共通している。

クラムリッシュや小倉氏が指摘するように、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの中央の区画がブラフマスターナ（ブラフマーの座所）と呼ばれる所以は、その区画が、古代インド思想における始源的な原理であり、大宇宙の中心とされるブラフマン（梵）の觀念に通ずることにあると考えられる⁽¹⁴⁾。非人格的な中性原理ブラフマン（梵）が人格化されて生まれた創造神ブラフマーは、世界の源泉を象徴する重要な神格として大宇宙の縮図であるマンダラの中尊とされ、またその故にブラフマーの占める領域の内外の各点は、土地の精霊の身体上の急所と対応する形で、避けられるべき重要な「マルマ（急所）」として認識されるものと推測される。そしてそれと同じような考えを背景として、内陣の中心線をブラフマーの線と称し、またグリッドの中心点をブラフマン（梵）に見立てる発想が生じたものと推測される。


非対称の伽藍構成を有するジャワのチャンディの中には、敷地中心点を象徴すると見られる指標物が置かれている事例が認められ、またその地点を避けて祠堂群がずらされているとも見なし得る点については既述の通りである。このような伽藍配置上の特質に、インドのヴァーストゥ・プルシャ・マンダラにおける「マルマ（急所）」の觀念の影響を見て取ることも可能であろう。

第2節 『マヤマタ』のシヴァ教寺院に見る神格配置

ここで注意しておかなければいけないのは、シヴァ派、ヴィシュヌ派の文献の別を問わず、ブラフマーを中尊とするヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに関する記述が認められるという点である。換言すれば、シヴァを本尊として祀る寺院であっても、あるいはヴィシュヌを本尊とする寺院でも、理念上、ブラフマーを中尊とするマンダラが基本的な設計の規範として用いられるという点で変わるところはない。

例えば、南インドを代表するヴァーストゥシャーストラ文献の一つであり、またシヴァ教の要素が比較的優勢な『マヤマタ』においては、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを基本とするグリッドに従って、本尊のシヴァに従属する神々を祀る祠堂の配列を定めることが述べられている。そこでは、寺院の規模等に応じて、9区画（3×3）から49区画（7×7）までの五種類のグリッドが想定されている。その内、最も複雑なスタンディラ（sthāṇḍila）という名の49区画のグリッド（図25）が用いられる場合には、ブラフマーの座所とされる中央の9区画の周囲に、シヴァに従属する32神を配することが先ず述べられる。続いて、49区画のヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに配せられた諸神の領域に対応する神格の名が列記される（23.45b-52）。例えば、マンダラにおけるサーヴィンドラ（Sāvindra）の領域にはシュリー（Sri）が、そしてインドラジャヤ（Indrajaya）の領域にはジエーシュター（Jyēṣṭhā）というように、計32神の座がそれぞれ定められる。一方、ブラフマーの座所とされる中央の9区画の中には、シヴァを祀る主祠堂が一区画のみを占めることが規定されており（23.4-5）、結果、それを取り囲むように、シヴァに従属する32神を祀る祠堂が配置されることになる。

ここで、以上に述べたスタンディラと称されるグリッドに配せられた諸神の配列と、チャン


 インドでは東を上にして作図する伝統があり、
 ここではそれに従った

イーシャ	シャシ	ナンディ ケーシュ ヴァラ	スラパティ	マハー カーラ	ディナ カラ	ヴァフニ
シュクラ	サラス ヴァティ	グリシャ (ナンディン)			シュリー	ブリハ スパティ
チャンデー シュヴァラ	ハリ (ヴィ シュヌ)	シヴァを祀る主祠堂			カ マ ラ ジ ヤ (フ ラ フ マ)	ガジャ ヴァダナ
ダナダ						ヤマ
ヴィーラ パドラ						ピンギ リティ
ドゥルガー	ウマー	グハ			ジエ シュター	チャー ムンダー
ヴァーユ	プラジャ ーパティ	ブリグ	ジャラ パティ	ヴィシュ ヴァカル マン	アガ ス ティ ア	ニルリ ティ

図 25
 スタンディラ 『マヤマタ』(23.45b-52)

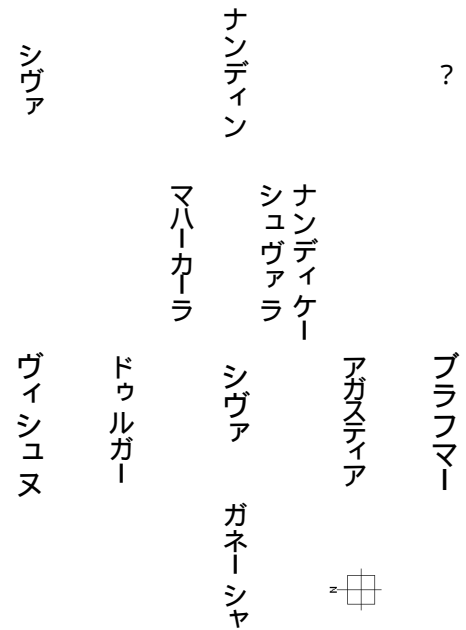


図 26
 チャンディ・ロロ・ジョングランの尊格配置

ディ・ロロ・ジョングランの各祠堂の内陣及び主祠堂の側・後房に安置された神像の配列に、共通する点が少なく無いことを指摘しておきたい。

既述のように、ロロ・ジョングランの内苑には、南北方向に二列に並んだ六棟の建築が配置されている(図2)。その内、西側の列の三棟の中心にあるチャンディ・シヴァの中心内陣には、シヴァ・マハーデーヴァの像が安置されている。チャンディ・シヴァの正面(東側)に置かれた門の両脇には、二基のチャンディ形の小建築が設けられている。向かって右側の小建築の内部にはシヴァの忿怒の相を表したマハーカーラ(Mahākāla)の像が、また左側のそれにはシヴァの変化相の一つであるナンディケーシュヴァラ(Nandikeśvara)の像が安置されている。マハーカーラ及びナンディケーシュヴァラは、門前守護神の役割を果たしているものと考えられる。

一方、チャンディ・シヴァの後房には、象頭を持つシヴァの子ガネーシャ(Ganeśa)の像が、また北側の側房にはシヴァの神妃ドゥルガー(Durgā)の像が、さらに南側の側房には、尊師の姿として現れたシヴァであるアガスティア(Agastya)の像が安置されている。これらの像の配置は、ジャワのシヴァ教チャンディのシヴァ祠堂における神像の典型的配置とされるものであり、その点は、シヴァを主神とするチャンディ・サンビサリ等の類例に共通している⁽¹⁵⁾。

さらにチャンディ・シヴァの北側の祠堂の内陣にはヴィシュヌの像が、また南側の祠堂の内陣にはブラフマーの像が安置されている。そしてチャンディ・シヴァの正面に正対して配置された副祠堂には、シヴァの乗り物であるナンディン(Nandin)の像が安置されている。シヴァを祀る主祠堂の正面に、ナンディンを祀る副祠堂を配置するのも、ジャワのシヴァ教寺院における定石である⁽¹⁶⁾。一方、ブラフマーを祀る祠堂の正面に正対して配置された副祠堂に安置されていた神像は遺失しているが、ヴィシュヌを祀る祠堂の前方に配置された副祠堂には、かつて三眼を有するシヴァの像が安置されていたことが報告されている⁽¹⁷⁾。

以上のチャンディ・ロロ・ジョングランの内苑に祀られた諸神の配置をまとめたものが[図26]である。これを先のスタンディラと称されるグリッドに配せられた諸神の配置と比較して見ると、

中央のシヴァの北・南側に、それぞれヴィシュヌ及びブラフマーが配せられる点が先ず共通している。さらに、グリッドの中央の九区画の東隣にはヴリシャ、すなわちナンディンの名が見えており、そのさらに東側には、マハーカーラ及びナンディケーシュヴァラも配せられている。そしてグリッドの北西側にはドゥルガーの名が、また南西側にはアガ스티アの名も見えている。また、中央の九区画の西隣の矩形の区画に配せられたグハは、ガネーシャと同じく、シヴァの子である（図25）。

口口・ジョングランの内苑に祀られた諸神の配置と、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを基本とするスタンディラと称されるグリッドに配せられた諸神の配置に、ある程度の共通した規則性を見て取ることは可能であろう。もっとも、スタンディラにおいては、シヴァを祀る主祠堂を置く中央の九区画及びグリッド全体とが、囲繞壁（プラーカーラ）によって二重に取り囲まれることが規定されており（23.4-5）、また中央のシヴァ祠堂を取り囲むように、32の附属的な祠堂が配置される点は口口・ジョングランの内苑と大きく異なっている。しかしながら口口・ジョングランの内苑は、中苑を画する囲繞壁によって取り囲まれており、また中苑には、多数の小祠堂が四方対称に整然と配置されている⁽¹⁸⁾。すなわち、同心方形の囲繞壁によって寺苑を区切り、さらに中心となる堂宇を、多数の附属的な祠堂で取り囲むという寺院伽藍全体の構成には、やはり共通性を見出し得るといえる。

また一方で、口口・ジョングランの内苑に見る非対称の伽藍構成に、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの「マルマ（急所）」の觀念の影響を想定し得るという点は既に指摘した通りである。以上の諸点は、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを基本とするシヴァ教寺院の神格配置及び配置計画法の理念が、インドからジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になるものと考えられる。もっともその理念が、いつ頃、またどのような形で中部ジャワ期のジャワに将来されたのかという問題に関しては、今後さらなる考察が必要である。

続いて、口口・ジョングランの内苑に認められる諸神の配列の中でも、シヴァの北・南側に、それぞれヴィシュヌ及びブラフマーを配する構図はとりわけ重要なものであり、後の東部ジャワ期、さらにバリへと継承されているものである点を明らかにしたい。

第3節 古代ジャワとバリに共通する三大神格の配置

『クンジャラカルナ』(*Kuñjarakarṇa*)は、古代ジャワの仏教信仰の内容と実態を示す説話である。その最古の原本の成立年代については諸説あるが、概ね14世紀後半から15世紀にかけて成立したとされる⁽¹⁹⁾。岩本氏によれば、ジャワに古くから伝えられるこの説話は、インドの系統をひくものでありながらも、インドにその原典を求めることができない、いわばジャワ的に改作されたものであるという⁽²⁰⁾。また当時のジャワの仏教は、ヒンドゥー教との混淆が進展していたとされるが、仏教説話の『クンジャラカルナ』においても、ヒンドゥー教のパンテオンに関する比較的詳細な説明が認められる。その第14章には、先ず諸方神とその方角について述べられており、それに続き、「・・・比類なき三柱の（神々の）住処（であるメール山）が見られ、その中央はシヴァの住処であり、南側はブラフマーの天界であり、そして北側にはヴィシュヌの住処がある（14.2）」と記されている。この文言から、聖なる山マハーメールの中央に座すシヴァの南側と北側に、それぞれブラフマーとヴィシュヌが住していることが窺われる。

次に、『コーラワーシュラマ』(*Korawāṣrama*)について考えてみたい。この文献は、インド起源の『マハーバーラタ』(*Mahābhārata*)の骨格を残しながら部分的に改変が施された、『マハーバーラタ』のジャワ人による続編とされる散文詩である⁽²¹⁾。スウェレンフレベール(J. L. Swellengrebel)は、『コーラワーシュラマ』の記述から、中心及び八方位を司る九柱の神々と、その諸神に対応する諸要素を導き出している⁽²²⁾（表1）。この表において、中心に位置する神はシ

ヴァであり、またその北側と南側に座す神は、やはりヴィシュヌとブラフマーである。また、イーシュヴァラ (Íśvara)、ブラフマー、マハーデーヴァ (Mahādeva)、ヴィシュヌの「方向」が、それぞれ「後ろ」、「左」、「前」、「右」とされていることから、中心に座すシヴァは西面しているものと解釈される。

さらにスウェレンフレーベルは、ジャワにおける創世神話として知られる『タントゥパングララン』(*Tantu Panggĕlaran*) において、「ブラフマーはバタラ・グル(シヴァ)の右手、ヴィシュヌはその左手である」と述べられていることを踏まえ、その神格の配列が、ロロ・ジョングランの主要寺院、つまりヒンドゥー教の三大神を祀る三基の祠堂の配置として表現されていると指摘している⁽²³⁾。

『コーラワーシュラマ』から導き出された分類体系が、次章で詳述するバリ島のナワサンガ (Nawasanga) ないしナワデワター (Nawadewatā) と呼ばれる天界図に類似していることが、ポットによって指摘されている⁽²⁴⁾。[表2]は、ナワサンガにおける九柱の神々と、それに関連する諸要素をまとめたものであるが、両表の相同性は明らかである。両表に共通して認められるシヴァを囲繞する八方神の内、ヴィシュヌとブラフマーを除く六神、すなわち、イーシュヴァラ、マヘーシュヴァラ (Maheśvara)、ルドラ (Rudra)、マハーデーヴァ、シャンカラ (Śaṅkara)、シャンプフ (Śambhu) はいずれもシヴァの別称であり、中心に座すシヴァの諸方が、シヴァの別神格によって守護されていることが理解される。

その他に注目される点は、『コーラワーシュラマ』において、ヴィシュヌとブラフマーの両神に、それぞれ「水」、「火」が配当されていることである。『コーラワーシュラマ』の第16章には、ティヤス・ニン・ティガ (*tyas ning tiga* 三つの核) と呼ばれる観念について記されており、そこにおいて、宇宙の中心に立つシヴァが、左手に火のついた香炉、また右手に(生命)の水の入った器を持って、火ですべてを焼き尽し、水ですべての生き物に生命を注ぐことが述べられている。これを踏まえてスウェレンフレーベルは、最高の原理を代表するシヴァが、北の集団(左・火)と南の集団(右・水)にまたがるものと推測し、またそこにいわゆる三位一体の思想を読み取り得ることを指摘している⁽²⁵⁾。

以上を示したような、中心のシヴァに対してヴィシュヌ及びブラフマーがそれぞれ北、南側に配せられる原則は、単に観念の上でのみ認められるものではない。それは、ジャワとバリの建築

や神像の配置として、具象化されている場合がある。

バリ島の平野部の屋敷の配置が、ナワサンガの観念を反映しているということは、すでにしばしば指摘されていることである⁽²⁶⁾。また、このナワ・サンガに基づく図像的な構想は、バリ・ヒンドゥーの総本山とされるプラ・ブサキ (Pura Bĕsakah) の伽藍配置にも認められる。

プラ・ブサキの北西側と南東側には、それぞれプラ・バトゥ・マデッ (Pura Batu Madĕg)、プラ・ダギン・クレテッ (Pura Daf in Krĕtĕg) が配置されており、この三寺院はいずれも背後にアグン山を背負って南西に面している。中央のブサキはシヴァ神に奉納された寺院とされ、一方、ブサキの北西側に位置するバトゥ・マデッはヴィシュヌ神、南東側のダギン・クレテッはブラフマー神に奉納された寺院とされる。さらに、バトゥ・マデッとダギン・クレテッの両寺院のシンボルとなる色は、それぞれ黒、赤とされている⁽²⁷⁾。

既述のナワサンガでは、黒及び赤色が、それぞれ北に座すヴィシュヌと南に座すブラフマーに配当されている。従って、ブサキを含めたこの三寺院は、ナワサンガにおけるシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの配列と属性に従って配置されていると考えられる⁽²⁸⁾。このようなヒンドゥー教の三大神の配列は、次に述べるジャワの寺院建築や神像の配置にも認められる。

中部ジャワの北部山間地のディエン高原には、ヒンドゥー・ジャワ期の最初期の建立とされるヒンドゥー教の遺構群が現存している。高原の中央部には五基のチャンディがコンプレックスを形成しているが、チャンディ・スリカンディ (Candi Srikandi) を除く四基の祠堂の壁龕に安置されていた諸神の像は、現在すべて失われている。

唯一、西面するスリカンディ (7世紀後半頃～8世紀前半頃) の南・北・背面の側壁の中央には、ピラスターで仕切られた厚肉の浮彫りが現存し、北面のパネルには一面四臂のヴィシュヌ、南面には三面四臂のブラフマー、さらに背面には一面四臂のシヴァが浮彫りされている。すなわちスリカンディの場合、中央のシヴァの北側と南側に、それぞれヴィシュヌ及びブラフマーを配する図像的な構想の下に、壁面パネルに神像が彫り込まれていると考えられる。

そして、このヒンドゥー教の三大神の配列をより明瞭に示しているのは、先のチャンディ・ロロ・ジョングランである。

また、東部ジャワで最大の規模を誇るヒンドゥー教の遺構であるチャンディ・パナタラン (Candi Panataran) の主祠堂の北側及び南側の壁龕には、かつてヴィシュヌとブラフマーの像が安置されていたことが報告されている⁽²⁹⁾。主祠堂の内陣に何が安置されていたかは明らかではないが、シヴァ教色の濃い同寺院の場合、主祠堂の内陣にはシヴァ神が祀られていた可能性が極めて高い。ここでもやはり、シヴァを中心として、その北側にヴィシュヌ、また南側にはブラフマーを配する図像的な構想が窺われる。

以上のごとく、シヴァ神を中央に立て、その北側と南側にそれぞれヴィシュヌ及びブラフマーが配せられる原則は、中部ジャワ期 (8世紀前半頃～10世紀前半頃) から東部ジャワ期 (10世紀前半頃～16世紀前半頃)、さらに今日のバリに至るまで、観念の上でも、また実際の形象の上でも認められるものである。ジャワからバリへと至るまでに、時代とともに変化している要素を割り引いたとしても、少なくともそこにヒンドゥー教の三大神の配列という共通の伝統の連続を想定することが可能である。

第4節 ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラとナワ・サンガを巡って

1. 敷地中心点に投影された神観念 - インドの「梵」概念を踏まえた解釈

さて、以上の考察を踏まえながら、非対称の伽藍構成を有するジャワのヒンドゥー教寺院に見る伽藍配置上の特質の中で、祠堂群が北側へずらされる傾向の意味するところについて考えてみたい。

ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラは、ヒンドゥー的な建築空間を読み解く上で、鍵となる重要な概念の一つであることは既述の通りである。その適用範囲は極めて広く、本章でも例証した寺院の伽藍配置は勿論のこと、主祠堂の平面もマンダラのグリッドに従って設計することが理論付けられている。寺院以外でも、例えば住居や村落、ひいては都城の計画に至るまで、マンダラの観念の影響が及ぶとされる。つまりそれらの様々な建築空間は、少なくとも理念の上では、マンダラを媒介として相同的な入れ子構造をなし、相互に有機的に結び合うことになる。他方、マンダラに配当される諸神の配列は星辰や太陽の運行を黙示し、それ自体にも宇宙の空間的な表現が認められる。そして須味山（メール山）や宇宙軸などの概念と複雑に重層することによって、ヒンドゥーの宇宙を表象する意図を色濃く示している⁽³⁰⁾。

しばしば指摘されるように、インドの文化的な要素を摂取した東南アジアの諸国では、王権の正統性を保証するものとしてインド的な宇宙観が重用され、実際に都城の建設などには、その宇宙論的構想に従った計画がなされていたようである⁽³¹⁾。そして寺院の伽藍配置にしても、やはりそれを一つの宇宙のレプリカに見立てる発想が基底にあったと想像することに不都合はなく、とりわけジャワのヒンドゥー教寺院の場合には、寺院建立の下地となる敷地の上に、地鎮祭儀礼を通じてヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに類する図形が描かれた、あるいはその儀礼的な所作の影響がジャワに及んだと解釈することが出来る。

チョーラ朝期にその原型が成立していたとされ、他の類似のヴァーストゥ・シャーストラ文献にも大きな影響を与えた非常に重要な文献と位置付けられているのが『マヤマタ』であるが、この文献に記述されたマンダラを基本とする伽藍配置用のグリッドに勧請された諸神の配置と、チャンディ・ロロ・ジョングラン内苑に配せられた諸尊の配置に、ある程度の共通した規則性を認められる点等は、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに類する神観念が、ジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になると考えられる点も既に述べた通りである。

そのマンダラとして抽象化された宇宙の空間的な中心、すなわち寺院敷地の中心点にあたる箇所は、既に繰り返し述べているように、意図的に避けられた上で聖別されている。しかしながらそれらの寺院には、宇宙的秩序の「中心」と呼び得る箇所がもう一つある。いうまでもなくそれは、主神シヴァを祀る空間である。とすると、「中心」が二つあるともいえる訳であるが、そのことはどのように理解されるであろうか？

ここで想起されるのは、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラで中央に配当される神格が、原則としてブラフマー神とされることである。これはシヴァを主神とする寺院を建立する際に描かれるマンダラの場合でも、あるいはヴィシュヌを主神とする場合でも同様である。そしてインドの諸文献において、「中心の区画」、「中心線」、「中心点」で示される箇所、あるいは避けられるべき箇所と関連付けられた空間上の「中心」は、共通してブラフマンとされる。

マンダラの中央に座を占めるブラフマー神は、宇宙の創造を司る神であると同時に、宇宙全体を貫く根本原理、あるいは宇宙本体としての、いわゆる「梵」（ブラフマン）の概念と密接な係わりを有している。また周知のように、「梵」と自己の帰一思想としての「梵我一如」こそは、シヴァやヴィシュヌなどの重要な神格が確立した後においても、ヒンドゥーの精神が終始一貫して追い求めてきた最重要テーマの一つであった。

翻って、ジャワのヒンドゥー教寺院における二つの「中心」の意味するところを考えるならば、その一方が主神シヴァの座所であることは明白である。そしてもう一方の、宇宙のレプリカとして構想された寺院敷地の中心点が表象するものを、万有を成り立たせる究極的なヒンドゥーの宇宙原理、すなわち「梵」との係わりを通じて論じることにも可能であるといえるだろう⁽³²⁾。

先の『マヤマタ』に記されたスタンディラと称されるグリッドにおいては、シヴァを祀る主祠堂が配置される中央の九区画は、ブラフマーの場所と明記されている。然るにその区画の南隣の矩形の区画には、カマラジャ、すなわちブラフマーの祠堂を設けることが規定されている。この

ようにブラフマーが二重に述べられることの意味を、『マヤマタ』は十分に説明してはいない。早急な結論は危険であるが、ブラフマン（梵）として象徴されるブラフマーが観念的な存在として中央の九区画を占め、またシヴァに従属する神としてのブラフマーが、別称カマラジャをもってシヴァの南側に独立した祠堂を設けていると見ることも一つの解釈として成り立ち得る。

仮にそのような観念が、チャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍配置に影響を及ぼしていると思像するならば、チャンディ・シヴァの南側にブラフマーを祀る祠堂が配置される一方で、寺院伽藍の中央部に、ブラフマン（梵）が観念されていると見ることもやはり可能であろう。

また『マヤマタ』では、「マルマン」について正確な位置は明示していないものの、建設用地の中央に、ヴァーストゥ・プルシャの4つの避けるべき「急所」が有ることを教えている。そして住宅の規定の中では、唯一敷地の中心に置かれることが許されているものとして「ブラフマー神に捧げられる台座」が挙げられているのは極めて興味深い。ここで思い起されるのは、ロロ・ジョングランの敷地中心点に置かれたチャンディのミニチュア、小塔である。『マヤマタ』における住宅の規定に類する理念が、ジャワでは寺院に適用されたものと想定すれば、「急所」として避けられた寺院敷地の中心点に、唯一置くことの許容された指標物は、ブラフマー神に捧げられた一種の呪物と解釈することが出来る。

ロロ・ジョングラン以外の類例においては、敷地中心点を象徴すると見られる指標物が置かれていない事例もあるが、いずれにしてもその地点を避けるかのように、祠堂群が北側にずらされる傾向の認められる点は既に指摘した通りである。

そしてこのような敷地中心点に、ブラフマーないし「梵」（ブラフマン）が観念されていると仮定するならば、それに対するリングないしシヴァ神像の位置は、主祠堂が東面する場合には北西側、また西面する場合には北東側ということになる。また、シヴァを祀る主祠堂の前方に正対して配置された副祠堂には、シヴァの乗り物であるナンディンの像が安置されるのが通常であるが、ここでナンディンに乗るシヴァ、すなわち主祠堂とその前方に配置された副祠堂のセットを完全なるシヴァの姿と捉えれば、そのセットは敷地中心点に対して、全体に北側へずらされていると見ることができる。要するに、主神であるシヴァに対して、敷地中心点に観念されるブラフマーないし「梵」（ブラフマン）が、南側に位置するように祠堂群がずらされていると考えれば、それは先に指摘した、中心・シヴァ、南・ブラフマーという神格配置の原則に従ったものとすることも出来る訳である。

インドに由来するヒンドゥーの空間理念に則って、ジャワの寺院において特別視されていた敷地中心点を、「梵」（ブラフマン）との関わりをもって解釈することには一定の妥当性があると言えるだろう。しかしここで問題となるのは、ジャワのシヴァ教寺院の敷地中心点に、リング状の立石の置かれる事例が認められることである。言うまでもなくリングは、ブラフマーではなくシヴァのシンボルとされるものである。シヴァ教優位のジャワにあって、ブラフマー神すらもシヴァの一変化と見られていた可能性も否定はし得ないが、次に全く別方向の観点から、つまりジャワからバリへと至る神観念に沿ってもう一つの解釈を考えて見ることにしたい。

2. 敷地中心点に投影された神観念 - 「ナワ・サンガ」概念を踏まえた解釈

筆者は先に、古代ジャワとバリとの間に、ヒンドゥー教の三大神の配列という伝統の連続を想定し得るという点を指摘した。ただし、バリのナワサンガの場合は、南北の軸に座すシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの他に、シヴァの別神格である六神が存在している。

ポットは、ナワサンガのそれぞれ北と南に座すヴィシュヌとブラフマーが、シヴァの変化相として明らかな他の六神とは異なる点に着目し、このことは偶然の産物ではなく、当初はシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーの三神のグループと、中心のシヴァを囲繞する八柱のシヴァの変化相のグループが存しており、その二つのグループが中央のシヴァを共通項として融合一体化された結

果、北と南に座していた二柱のシヴァの変化相が、それぞれヴィシュヌとブラフマーにその座を譲ることになったのではないかと推測している⁽³³⁾。

一方、先に引用したジャワの仏教説話である『クンジャラカルナ』の第14章には、中央・シヴァ、北・ヴィシュヌ、南・ブラフマーという配列の他に、東・インドラ (Indra)、南東・アグニ (Agni)、南・ヤマ (Yama)、西・バルナ (Baruna)、北・クウェーラ (Kuwera)、北東・イーシャーナ (Íśana) という諸方神の配列について述べられている⁽³⁴⁾。テーウ氏とロブソン氏が指摘するように、ここにはインドの諸方神の観念の影響が認められる⁽³⁵⁾。

インドのローカパーラ (lokapāla) と称される諸方神とその方角は、それぞれ、東・インドラ (Indra)、南東・アグニ (Agni)、南・ヤマ (Yama・ないし Dharma)、南西・ニルリティ (Nirṛti・ないし SŪrya)、西・ヴァルナ (Varuṇa)、北西・ヴァーユ (Vāyu・ないし Marut)、北・クベラ (Kubera)、北東・イーシャーナ (Íśana・ないし Candara, Soma, Pṛthivī) である⁽³⁶⁾。この諸方神の観念が、古代ジャワの刻文や他の宗教文献にも認められることは、従来の研究によって既に明らかにされている⁽³⁷⁾。また、東部ジャワのチャンディ・シンガサリにおける神像の配置が、この諸方神の観念に従っていると考えられることが報告されている⁽³⁸⁾。他、チャンディ・ロロ・ジョングランのシヴァを祀る主祠堂の浮彫りパネルの配置も、この観念に従ったものであることが指摘されている⁽³⁹⁾。

先の『クンジャラカルナ』においては、南西のニルリティと西のヴァルナについての記述はないが、他の六神の名称と方角は、インドのそれに完全に合致している。この仏教説話に認められるヒンドゥー教のパンテオンでは、ヒンドゥー教の三大神と八柱の諸方神が、各々相応しい位置を占めているものと考えられる。また、その三神のグループと八神のグループにおいて、北と南に座す神が重複して存在していることに鑑みれば、先のポットの指摘もそれなりに説得的であるようにも思われる。もっとも、ローカパーラの観念の線上にナワサンガの観念を位置付けられるのかという問題は、未だ十分に明らかにされていない点であり、これは次章にて筆者の見解を提示したいと思う。しかし以上のような限界を念頭に置いたとしても、少なくともジャワとバリのヒンドゥー教のパンテオンにおいて、ヒンドゥー教の三大神及び八方位を守護する諸神が、極めて重要な「座」を占めていたことは疑い得ない。

ここで、チャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍に配せられた諸神の配置について改めて考え直してみたい。既に述べたように、ヒンドゥー教の三大神を各々祀る三基の祠堂が、ロロ・ジョングランの寺院伽藍において中心的な位置を占めている。さらに注目されるのは、寺院敷地の中心点に置かれたチャンディのミニチュアと同様のものが、敷地の主方位と副方位に位置する地点にも置かれていることである。ロロ・ジョングラン以外の類例においても、敷地の主方位と副方位に位置する地点に、何らかの指標物が置かれる事例は少なく無い。例えばチャンディ・サンビサリの敷地の主方位と副方位に位置する地点には、八個のリング状の境界石が置かれている。このリング状の境界石が配せられた八地点が、敷地中心点に次いで、「聖度」の高い箇所として位置付けられていたことは想像に難くない。

ここで想起されるのは、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの外方が数多くの区画によって分割され、その各区画に住する様々な神々によって、マンダラの諸方が守護されているということである。また、伽藍の八方を守護する諸神の神殿が設けられている寺院はインドにも例が認められる⁽⁴⁰⁾。すなわちスクモノも指摘するように、ジャワのヒンドゥー教チャンディにおいては、結界された寺院敷地の諸方を守護する八神が観念されている可能性が考えられる⁽⁴¹⁾。そしてここで、敷地の中心と八方位に位置する地点にリング状の立石が置かれていることにより、中尊のシヴァを八種のシヴァの変化神・別神格が圍繞しているものと素直に解釈してみたい。

とすると、中部ジャワ期のヒンドゥー教寺院の中で、最も完成度の高いものとして位置付けられるチャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍配置においては、三神 (シヴァ、ヴィシュヌ、ブラ

フマー)の周囲に、シヴァの別神格八神が配せられる図像として構想された神格配置が取り込まれているものと理解される。敷地中心点に置かれたリング状の立石も、そのままシヴァの別神格と考えれば良い。つまり、シヴァ神を中心として北にヴィシュヌ、南にブラフマーを配置する体系と、中心のシヴァの八方にシヴァの別神格八神を配する体系が融合一体化して、ロロ・ジョングランの伽藍が構成されていると見る事が出来る。

そして先述のナワ・サンガであるが、中心のシヴァの南北に配せられるブラフマー及びヴィシュヌにしても、シヴァの別神格であるという認識がバリでは完全に確立されていると言われる。しかしながらポットが言うように、シヴァの別神格であることが明らかな他の六神(イーシュヴァラ、マヘーシュヴァラ、ルドラ、マハーデーヴァ、シャンカラ、シャンプフ)と、ブラフマー及びヴィシュヌは分けて考えるべきであろう。すなわちなワ・サンガとは、中心のシヴァの八方にシヴァの別神格八神を配する体系の中に、中心のシヴァの北にヴィシュヌ、また南にブラフマーを配置する体系が織り込まれた神観念であると言えるだろう。

したがって中部ジャワで最も完成度の高いシヴァ教寺院であるチャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍に投影された神格配置は、インドの神観念の影響とは別に、むしろバリのナワ・サンガの文脈において、矛盾なく、そして過不足なく説明出来るのである。

しかしジャワとバリが同じヒンドゥーの流れに有るとはいえ、時間的な落差や地域的な隔たりを無視する訳にはいかない。本章にて、中心のシヴァの北にヴィシュヌ、また南にブラフマーを配置する体系が、中部ジャワ期から後の東部ジャワ期、そして今日のバリに至るまで通底して認められることには言及したが、その点のみを根拠にするにはバリのナワ・サンガの初発的な図像がジャワに有ると推断するのは危険である。次章ではその問題について筆者の解釈を示したい。

第5節 小結

本章ではまず、非対称の伽藍配置の特質に鑑みながら、インドの代表的な建築書の読解に基づいた上で、このような祠堂群の「ずらし」がなぜ生じるのかという問題についての考察を行った。

既往の研究では、インドのヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに基づく観念の下に、寺院敷地の中心点が最も脆弱な急所と見なされ、その地点を避けるべくシヴァを祀る主祠堂がずれて配置されていると解釈されている。本稿で改めて検証を行った結果、その解釈は一定の説得性を有するものであることが改めて確認された。このことに加えて、南インドの代表的な建築書である『マヤマタ』に記された、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを基本とするグリッドに配せられた諸神の配置と、チャンディ・ロロ・ジョングランの内苑に配せられた諸神の配置に、ある程度の共通した規則性を認め得る点等は、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに類する神観念が、ジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になるものと考えられる。

また、インドの諸文献において、「中心の区画」「中心線」「中心点」として表される急所、あるいは避けられるべき箇所と関連付けられる空間上の「中心」が、ブラフマーないし「梵」(ブラフマン)と結び付けられているという事実を考慮すれば、本稿で考察の対象としたヒンドゥー教寺院の敷地中心点に、ブラフマーないし「梵」(ブラフマン)が観念されていると見ることも可能と思われる。

ジャワのヒンドゥー教において、シヴァの北・南側にそれぞれ配置されるヴィシュヌ及びブラフマーと、中央のシヴァを取り囲む八方神は、極めて重要な図像を成していたと考えられる。そしてそのような図像を、建築空間に取り込んだ初期の事例として、チャンディ・ロロ・ジョングランを挙げることが出来る。すなわち、八神によってヒンドゥー教の三大神が取り囲まれる図像として構想された大宇宙の縮図が基本的観念として存在し、その図像的空間を寺院の伽藍配置にとりこむという配置設計の理念の下に、チャンディ・ロロ・ジョングランが造営されたものと考

えられる。

他方、ジャワの諸寺院の敷地の中心点、そして八方位に位置する地点に置かれたリング状の立石を、そのまま素直にシヴァの別神格九神と見れば、ロロ・ジョングランの伽藍を、シヴァの別神格八神によって中央神格のシヴァが、さらにはヒンドゥー教の三大神が取り囲まれる図像として読み替えることも可能である。そしてこの図像は、先述のインドの神観念からの影響とは別の文脈、すなわちバリへと連なるナワ・サンガの観念の中で、むしろ矛盾なく、そして過不足なく説明することが出来ることを述べた。

本章では、ヒンドゥー教寺院の伽藍に潜在する図像的な空間を、その一端ではあれ明らかにすることができたものと考えている。そして中部ジャワ期の仏教が密教色を含むものであったと考えられる限り、このヒンドゥー教の図像は、中部ジャワの密教図像との比較によって、その輪郭がより一層明らかになるものと期待されるが、この点についての検討は、最終章の第5章で行うことにしたい。

注記

- (1) ヴァーストゥプルシャマンダラを用いて行う儀礼は、大部分のシルパシャーストラないしヴァーストゥシャーストラ文献に記されていると言われ、また粗密の差はあっても、プラーナ(Purāṇa)文献の建築の章や、中世南インドの儀礼の綱要書にもその記述は認められる(小倉泰「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性」^① - ヴァーストゥプルシャマンダラと寺院の平面設計」『東洋文化研究所紀要』第115冊、東京大学東洋文化研究所、1991、pp. 4-8)。またこれらの文献は、西インド(グジャラート、ラージャスターン)、中央インド(マルワー)、南インド(タミール、ケーララ)、さらに東インド(オリッサ)でも書かれており、従来出版されている刊本の他にも、今なお膨大な量の文献が写本の形でインドの各地に眠っているという(小倉泰「聖化された空間 - 建築」『インドの夢・インドの愛 - サンスクリット・アンソロジー』(上村勝彦・宮元啓一 編)春秋社、1994、pp. 382-383)。
- (2) ヴァーストゥプルシャマンダラの観念とその表象については、Kramrisch, S., *The Hindu Temple*, 2 Vols., Delhi, Varanasi, Patna: Motilal Banarsidass, [First Published in 1946 by the University of Calcutta], 1976, pp. 19-97に詳しい。一方、小倉氏及びマイスターは、ヴァーストゥプルシャマンダラの観念が、実際のインドの寺院の平面設計を規定していたことを明らかにしている(前掲書注(1)；Meister, W. Michael, “Maṇḍala and Practice in Nāgara Architecture in North India”, *Journal of the American Oriental Society* 99-2, 1979, pp. 204-219; “Muṇḍeśvarī: Ambiguity and Certainty in the Analysis of a Temple Plan”, in *Kalādarśana: American Studies in the Art of India*, Joanna G. Williams ed., Delhi, 1981, pp. 77-89; “Analysis of Temple Plans: Indor”, *Artibus Asiae* 43, 1981-82, pp. 302-320; “Geometry and Measure in Indian Temple Plans: Rectangular Temples”, *Artibus Asiae* 44, 1983, pp. 266-296)。またバフナは、マンダラの諸神を画する基準格子が、マンダラの理念を実現する手段として、いかなる効果を有するものであったかについて考察している(Bafna, S., “On the Idea of the Mandala as a Governing Device in Indian Architectural Tradition”, *Journal of the Society of Architectural Historians* 59-1, 2000, pp. 26-49)。さらに、都市計画とマンダラとの関係については、ヒンドゥー王朝の計画都市であるヴィジャヤナガルのレイアウトと、マンダラとの関連の有無を含めて論じたものとして、Fritz, John M., “Vijayanagara: Authority and Meaning of a South Indian Imperial Capital”, *American Anthropologist* 88(1), 1986, pp. 44-55; 小倉泰, 「中世都市ヴィジャヤナガル - ヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈」『東洋文化』72, 1992, pp. 165-189が挙げられる。

- (3) Bernet Kempers, A. J., “Prambanan, 1954”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p.8; Soekmono, R., *Candi: fungsi dan pengertiannya*, Ph.D. thesis Universitas Indonesia, Jakarta, 1974, pp. 238-239
- (4) 前掲書注(2) p. 46 マンダラの種類は64区画と81区画に限らず, 文献によってはより多くのマンダラについて記されており, 例えば『マヤマタ』では, 1区画(1×1)から1,024区画(32×32)まで, 32種類のマンダラが分類されている(Dagens, B. ed., *Mayamata, traité Sanskrit d’architecture*, 2 Vols., Pondichéry: Institut Français d’Indologie, 1970-1976, pp. 80-84)。
- (5) プラマー, マイスター及び小倉氏は, 各々実在する寺院の具体例を挙げて, マンダラにおける「マルマ」の観念が, 実際のインドのヒンドゥー教寺院の祠堂の平面設計に影響を与えた可能性を論じている[Pramar, V. S., “Some evidence on the wooden origins of the Vāstupuruṣamaṇḍala”, *Artibus Asiae* 46, 1985, pp. 305-311; 前掲書注(2) p. 85; 前掲書注(1), 1991, pp. 43-50, 小倉泰『インド世界の空間構造 - ヒンドゥー寺院のシンボリズム』(東京大学東洋文化研究所研究報告), 春秋社, 1999, pp. 67-90]
- (6) 前掲書注(2) p. 53
- (7) 『ブリハットサンヒター』の全和訳に訳注を記したものとして, ヴァラハーミヒラ『占術大集成(ブリハット・サンヒター) - 古代インドの前兆占い』矢野道雄, 杉田瑞枝 訳注, 全2巻, 東洋文庫五八九) 平凡社, 1995 がある。全編にわたってト占の書という体裁をとるが, そこには当時のあらゆる知識が盛り込まれている。本稿で取り上げるのは, 「建築学」についてまとめられた第52章であるが, その内容については同書を参照した。
- (8) 「マルマ」の大きさは, 一区画の八分の一であるとされる。
- (9) 本稿で引用する箇所の翻訳は, 前掲書注(4) を参照した。『マヤマタ』に記された建築様式は, 少なくとも初期チョーラ期(9世紀中葉～10世紀末)には成立していたとされる。
- (10) 本稿で引用する箇所の翻訳は, Acharya, P. K., *Architecture of Mānasāra, Translated from Original Sanskrit*, Mānasāra Series: Vol. IV, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation, [First Published in 1934 by Oxford University Press, London], 1980 を参照した。
- (11) 前掲書注(1) p. 9; 前掲書注(2) p. 176; 前掲書注(1) pp. 392-403; 前掲書注(5) pp. 103-160
- (12) Boner, A., Sadāśiva Rath Sarmā, Bäumer, B., *Vāstusūtra Upaniṣad: The Essence of Form in Sacred Art, Sanskrit Text, English Translation and Notes*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1982, pp. 80-81
- (13) 前掲書注(12)p. 2
- (14) 前掲書注(2) p. 58, 前掲書注(2) p. 176
- (15) チャンディ・サンピサリの主祠堂に安置される神像の配列は, チャンディ・ロロ・ジョングランのチャンディ・シヴァのそれと全く同一である。ただし, 神像の安置場所であるチャンディ・シヴァの両側房・後房, そして正面の門の両脇に置かれた小建築は, サンピサリの主祠堂の両側・背面の壁に穿たれた壁龕, 正面入口の両脇に設けられた壁龕の各々に対応する。そして, チャンディ・グヌン・サリの主祠堂入口の左側(向かって右側)に設けられた壁龕に, マハーカーラの像が安置されていた可能性が高いことが知られ(Nugrahani, D. S., Prisantanto, H., Fauzi, I. ed., *Laporan ekskavasi penyelamatan situs Gunungsari* 1998, Kantor Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Propinsi Jawa Tengah dan Jurusan Arkeologi Fakultas Sastra Universitas Gadjah Mada, 1988, p. 170), またチャンディ・バドゥの主祠堂の北・南面の壁龕に, 各々ドゥルガー, アガスティアの像が安置されていたことも確認される(*Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1929, p. 252)。その他のチャンディの神像は, 遺失している場合が多く, また神像が発見されている場合でも, 当初の安置場所を特定すること

はできない。

- (16) チャンディ・イジョー, チャンディ・グヌン・ウキル, チャンディ・グラの主祠堂の正面に配置された副祠堂には, ナンディン像が安置されていることが確認される。
- (17) IJzerman, J. W., *Beschrijving der oudheden nabij de grens der residentie's Soerakarta en Djogdjakarta*, Batavia: Landsdrukkerij, 1891, p. 57 北側の副祠堂からは, 額に第三の目を入れた, 一面四臂のシヴァ神像が安置されていたことが確認されている。
- (18) 中苑に配置される 224 基の小祠堂は, チャンディ・プルワラ (Candi Perwara) と呼ばれている。
- (19) Teeuw, A.; and Robson, S. O., *Kuñjarakarṇa Dharmakathana: Liberation through the law of the Buddha, An Old Javanese Poem by Mpu Dusun*, The Hague: Martinus Nijhoff, 1981, p. 1 本稿で引用した箇所の翻訳は, 同書を参照した。
- (20) 岩本裕「インドネシアの仏教」『アジア仏教史・インド編Ⅵ, 東南アジアの仏教 - 伝統と戒律の教え』侠成出版社, 1973, p. 272, 281
- (21) 『コーラワーシュラマ』のローマ字化と翻訳を行い, 注釈を加えたものとして, Swellengrebel, J. L., *Korawācrama, een oud-Javaansch proza-geschrift*, uitgegeven. vertaald en toegelicht, Santpoort: Mees, 1936 がある。
- (22) スウェレンフレーベルによる前掲書の序文中の「内容について」の邦訳として, (J・L・スウェレンフレーベル「コーラワーシュラマ(部分)」『オランダ構造人類学』(宮崎恒二, 遠藤央, 郷太郎 編訳) 1987, pp. 133-152) があるが, [表1] は同書の 142, 144 頁に掲載された表を参照して作成した。
- (23) 前掲書注 (22)p. 146
- (24) Pott, P. H., *Yoga and Yantra: their interrelation and their significance for Indian archaeology*, The Hague: Martinus Nijhoff [translated by Rodney Needham, First Published in 1946, Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Translation Series 8, Leiden: E. J. Brill], 1966, pp. 134-135
- (25) 前掲書注 (22)p. 145
- (26) Tan, Roger Y. D., 1967, “The domestic architecture of South Bali”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 123, pp. 442-475; 鏡味治也「バリ島の住居と世界観」『環中国海の民俗と文化 - 4 風水論集』(渡邊欣雄・三浦國雄 編) 凱風社 1994, p. 71 等
- (27) Hooykaas, C., *Agama Tirtha: Five Studies in Hindu-Balinese Religion*, in: *Verhandelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen*, afd. Letterkunde, Nieuwe Reeks-Deel LXX-No. 4, Amsterdam, 1964, p. 178
- (28) シヴァに奉納された中央のブサキのシンボル・カラーは「白」であり, ナワ・サンガの中央のシヴァの「混合色」とは異なっている。一方, ナワサンガの諸神の内, 「白」に象徴されるのは東のイーシュヴァラである。ここで思い起こされるのは, 『コーラワーシュラマ』において, 東と中心に座す神が明確に区別されていなかった点である([表1]の表注)。恐らく東のイーシュヴァラは, 中心のシヴァと同等か, それに次いで重要な存在と見なされているのではなかろうか。
- (29) Krom, N. J., *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche kunst*, Vol. II, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, [First edition 1920], 1923, p. 267
- (30) ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの理論と実際について, 既往研究の推移とその問題点に鑑みた上で, 包括的な考察を行った近年の良書として, 前掲書注 (5) がある。
- (31) ロバート・ハイネ＝ゲルデルン, 大林太良 訳「東南アジアにおける国家と王権の観念」『神話・社会・世界観』, 1972(原典は, Heine-Geldern, Robert, “Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia”, in; *Data Paper*: no. 18. *Southeast Asia Program*, Department of Asian Studies,

Cornell University, 1956); 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会, 1982, pp. 25-65 など。

- (32) しかしここで注意すべきは、ブラフマーの場所として位置付けられているのはマンダラの中央区画であって、その「中心点」がブラフマーに同定されている訳ではないことである。「中心点」を急所とみなし、さらにその地点をブラフマンと称する事例はインドに認められるが(前掲書注(12)p.16), 殊に建築の設計方法を題材とするヴァーストゥ・シャーストラ文献において、そのような事例を筆者は寡聞にして知らない。とすれば、マンダラの特定の神格との関連はさておき「中心点」を形式的に外す配置様式のみがジャワに将来されたという見方も、一応は可能であろう。しかしながら、急所として避けられた「中心点」が帯びていたはずの象徴的な意味は、やはり軽視されるべきではない。そもそも、マンダラの「中心点」がなぜ「急所」として認識されるかといえは、その地点がヴァーストゥ・プルシャの身体における文字どおりの「急所」に符号するからである。このヴァーストゥ・プルシャは、元来は土地に憑いた羅刹の類に過ぎなかったものが、その上に覆い被さるよう請来された神々によって調伏・訓化され、そこで初めて土地や建物を守護する半神としての地位を得る(前掲書注(5) pp. 92-93)。ヴァーストゥ・プルシャと諸々の神々とが、不可分の関係にあることはいうまでもないだろう。つまり「急所」という考え方自体、マンダラとの関係を抜きにしては成立し得ない概念のはずである。そして「急所」として避けられるマンダラの「中心点」は、ブラフマーによって占有される中央区画の、最も重要というべき「中心点」にあたる箇所でもある。ひいては、マンダラとして表象された大宇宙の縮図の「中心点」とも見れる。このように、重層的に聖別された「中心点」に、宇宙の根本的な源としての意味が付与されていたとするならば、それを理解する上で最も有効なヒンドゥーの概念は、インドからの影響を考える限りでは「梵」(ブラフマン)ということになるのではなかろうか。
- (33) 前掲書注(24)pp.135-136
- (34) 前掲書注(19)pp. 108-109
- (35) 前掲書注(19)p. 22
- (36) Liebert, G., *Iconographic Dictionary of the Indian Religions: Hinduism-Buddhism-Jainism*, Leiden: E. J. Brill, 1976, p. 154
- (37) 前掲書注(19)pp. 24-25
- (38) Lohuizen-de Leeuw, J. E. van, "The Dikpālakas in ancient Java", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, pp. 356-368
- (39) Tonnet, M., "De godenbeelden aan den buitenmuur van den Ćiwa-tempel te Tjañdi Prambanan en de vermoedelijke leeftijd van die Tempelgroep", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 60, 1908, pp. 128-149; 前掲書注(38)pp. 356-384; Jordaan, Roy E., 1992, "Sūrya and Nairṛta on the Śiva temple of Prambanan", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 148, pp. 59-67
- (40) 小倉泰「タミル・ナードゥにおける王権と寺院 - 王の神格化をめぐる」『東洋文化研究所紀要』第118冊, 東京大学東洋文化研究所, 1992, p. 109
- (41) 前掲書注(3) pp. 236-237